



県立広島大学 Prefectural University of Hiroshima

地域連携センター報

Vol. **13**

COMMUNITY LIAISON CENTER

平成23年10月20日発行

県立広島大学地域連携センター

〒734-8558 広島県広島市南区宇品東一丁目1番71号 電話082-251-9534 E-mail:renkei@pu-hiroshima.ac.jp

フィールド科学教育研究センター開所式

生命環境学部附属フィールド科学教育研究センターの開所式が6月17日、本学の開学記念行事の一環として行われました。式には文部科学省高等教育局大学振興課専門官，公立大学協会事務局長，広島県議会議員，包括協定締結市町長，産学連携関係者や地元高等学校長など20名の来賓のほか，学長，副学長，事務局長など学内関係者，報道関係者を含め50名の出席がありました。赤岡功学長の挨拶につづいて，藤原章夫文部科学省高等教育局大学振興課長，滝口季彦庄原市長，山口寛昭世羅町長から祝辞をいただきました。さらに，入船浩平センター長からセンターの概要，スタッフ紹介の後，センター管理棟の入口に掲げられた看板の除幕がありました。その後，食品加工場で地元の方の協力により行われた学生のソバ打ち実習の見学もあり，参加者の皆さまには地元産ソバの味を堪能いただきました。

当日午後には，開所式関連行事として五十部誠一郎独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構食品総合研究所食品工学研究領域長を招いて，同センター設置趣旨にも沿った「地域振興や6次産業化のために必要な人・技術・連携」と題する講演会を開催しました。100名を越す学生・市民が聴講し，この方面の関心の高さが窺われるものとなりました。

同センターは，これまで附属教育研究施設として環境工学実験棟の新設，食品加工場の設備改修が行われています。さらに，平成20～22年度の文部科学省で採択された優れた教育プログラムである「学士力向上を図るフィールド科学の創設」の成果を受けて，本学重点事業の一つとしてフィールド科学教育の充実や地域貢献を目指し，食や農，環境にかかわる幅広い教育研究，地域貢献を行うセンター組織として4月より新たな活動を始めています。今後，地域連携センターも当該センターと協力し，一層の地域貢献を図りたいと思います。



広島キャンパス

HIROSHIMA CAMPUS

協働事業

平成23年度地域戦略協働プロジェクト事業 〈江田島市〉

本年度は「江田島市の食材を活用した健康・地域活性化」のテーマで協働事業を行っています。また、過去2年間のテーマである「江田島健康プラン」に基づき、健診等で生活習慣の改善が必要と指摘された市民への介入指導を沖美ふれあいセンターで行いました。申し込みのあった35名を対象として、4回の連続講座を開催しました。健康科学科の加藤秀夫教授、西田由香准教授、佐野尚美助教と大学院生2名、学生4名が運営に当たり、好評のうちに終わりました。その成果が本年度の健診結果にどう活かされるか、楽しみです。

開催日	「体の悪いあぶらを減らそう！」プログラム
3月9日	【病気について知ろう】講話・血液検査・体脂肪測定・生活習慣（食事、運動）の調査説明
3月22日	【栄養編】講話・調査票の回収・検査結果速報
4月26日	【自分に合った生活習慣プログラムを作ろう】個別栄養相談会
5月31日	【健康づくりに取り組む秘訣は!?!】情報交換会（食習慣などによるグループ別）



体脂肪測定



情報交換会



個別栄養相談会

産学連携

〈広島県商工会連合会〉

本学と協定を結んでいる広島県商工会連合会の調査研究事業《地域資源∞全国展開プロジェクト》に関わる研修会が5月15日に開催されました。来年のNHK大河ドラマ「平清盛」にあわせた、地域資源の掘り起こしと有効活用を目指したプロジェクト事業で



研修会（広島県商工会連合会会議室にて）

す。この研修会に国際文化学科松井輝昭教授が招かれ、「平清盛の厳島参詣と旅の風景－外来者の眼差しから－」と題する講演を行いました。出席者の委員の皆さんは、たいへん熱心で、このプロジェクトにかける意気込みが伝わってくる研修会でした。

公開講座

「宮島の祭」

広島県立図書館との初めての連携事業として、6月から8月にかけて計5回、宮島の神事・祭礼をテーマとした公開講座を開講しました。会場となった県立図書館では図書館所有の宮島の資料を使い、書庫見学も実施するなど、充実した講座となりました。

「生命を支える‘もの’を身近に感じる」

7月の平日夜間、4回にわたってタンパク質やDNAについて学ぶ講座を開講しました。講義の翌週に実験を体験するという講座の形式が好評でした。



「マルチメディアの世界から英語を楽しむ」

7月の平日夜間、4回にわたって英語講座を開講しました。歌を使った発音練習、インターネット上の無料英語学習サイトの体験、明治期の英語教科書の紹介、グローバル経済の講義など、延べ95名がマルチメディアラボでさまざまな英語に挑戦しました。

「みんなでつくろう！ 簡単おやつ」

6月の土曜日、3日間にわたり、楠那公民館と連携して、小学生対象のおやつ講座を行いました。ほうれん草のパウンドケーキ、手づくりのどら焼き、フルーツパフェなど、子どもにも簡単にできるおやつづくりを延べ73名が楽しみました。

「酒の文化誌」

6月から7月の土曜日4週、歴史、文学、音楽、絵画の分野で「酒」をテーマとした講座を開講しました。延べ306名の方が受講されました。

「お話の国の扉を開けて」

7月28日と8月11日の2日間、廿日市市の2ヶ所の市民図書館で、「猫とねずみ」「熊と竜」をテーマに、小学生が本に親しむ講座を開催しました。

研究紹介

日中言語比較, 日本語・中国語の言語テスト研究

人間文化学部国際文化学科 教授 侯 仁 鋒



言語教育の研究者として、中国人向けには日本語を、日本人向けには中国語を指導してきました。中国語教育では、「発音よければすべてよし」という教え方・学び方を徹底して貫いています。コミュニケーション

を誤解なく成り立たせるには、音の標準化が大切だからです。

日本語と中国語は、漢字を共用しながらも語族の異なる言語であるとされています。一方、言語学では、すべての言語は共通の特徴を持っているという考えもあります。そこで、長年に亘り、日中両言語の共通点・相違点を検討分析して、いわゆる日中言語対照研究に当たってきました。それぞれの言語の特徴をしっかりと捉え、両国の学習者に、お互いの言語にアプローチするための、より望ましい踏み台を提示しようと取り組んでいます。

また、今の世の中は試験だらけと言っても過言ではありません。日本で実施されている中国語に関する試験に限っても、「中国語検定試験」をはじめ、5~6種類あります。なぜ試験を行うのか、答えは「その言語の学習成果を公正で正確に評価する」ためです。しかし、これらの試験は果たしてどれほど機能しているのか、どのようにすればさらに機能を果たせるのか、即ち言語テストの信頼性と妥当性を研究し、社会的に貢献できる言語テストの在り方を追究しています。

「夏休み理科教室」

8月4日と9日の2日間、本学と廿日市市の大野西市民センターで、それぞれ1回ずつ、理科教室を開催しました。小学校3年生から6年生44人が、クロマトグラフィーを使ってサインペンや植物の葉の色素を分析し、理科実験の楽しさを体験しました。



発展途上国の経済発展をマクロ経済学の観点から研究

経営情報学部経営学科 教授 片 桐 昭 司

今から20数年前、インドネシアのジャカルタの街を歩いた時、車の排気ガスを直接吸い込まないように口にハンカチを押し当てて歩きました。当時、そして現在でもそうですが、インドネシアは経済発展の真ただ中で、大気汚染に目をつむり経済成長を優先させる事情があったと思います。今年3月下旬に、再びジャカルタを訪れる機会がありました。大気汚染はかなり改善されていましたが、そのかわり、交通渋滞が深刻化していました。現在、本学で経済発展論など経済に関する講義を行っていますが、当時は経済学とは無縁の生活を送っていたので、今の自分を考えますと何かの因縁を感じます。

発展途上国の経済発展といっても特別な理論やモデルがあるわけではありません。あるとすれば、発展途上国固有の政治・文化や慣習などの社会的制度に基づく政治・社会学や文化人類学などの研究がそうかもしれません。これは理論経済学の観点からいえば理論やモデルというものではありませんが、発展途上国を分析するには必要な研究分野だと思えます。しかしながら、私の研究分野は、一国全体をとらえたマクロ経済学の観点からであるため、具体的には経済成長理論を基礎とした理論的および実証的研究ということになります。そして先進国の経済成長理論を発展途上国に応用することになりますが、経済発展に関する発展途上国特有の要因があるため、そのことが発展途上国の経済分析をする際の足かせにもなります。しかしながら、東アジアの経済発展パターンをみれば、先進国の理論やモデルが適用できることも事実です。現在は、世界的規模における所得の不平等がICTの進展とどのような関係にあるのか、そして両者に関係があるとしたら、どのようなメカニズムになっているのかを理論的・実証的に研究しています。

「母と子のための小さなコンサート」

6月の土曜日、広島キャンパス図書館と連携し、図書館フロアのグランドピアノを使ったコンサートを開きました。ショパンやリストの演奏に対して、「目の前で聴いて、キラキラした音玉が見えました」という感想がありました。



庄原キャンパス

SHOBARA CAMPUS

産学官連携

平成23年度しょうばら産学官連携推進機構総会

6月2日に庄原市で開催されました。昨年度の本学との連携事業は14件でした。他に、教員からの情報提供の依頼、地域からの学生派遣の依頼、研究会やセミナーなどの連携がありました。マッチング事業の成果の一つとして、油分分離装置の技術発表会を開催しました。

今年度は、マッチング事業、プロジェクト事業、新規事業、講演・講習事業、企業助成事業を予定しています。新規事業では、中国経済産業局、庄原市、本学、(社)中国地域ニュービジネス協議会とともに「第4回地域づくり連携サミット」を11月25～26日に庄原市で開催します。特に、マッチング事業では、本学における技術シーズと産業界などからのニーズを仲介することによる新規のマッチングを期待しています。

公開講座

「庄原の自然とくらしー庄原学入門」

本講座は庄原市教育委員会と本学が共催する講座で、本学の前身のひとつである広島県立大学時代から数えると今年度で22年目を迎える歴史のある講座です。今回は、昨年度のしょうばら産学官連携推進機構の事業であった「『庄原学』の構築のための基礎研究」(研究代表者生命科学科村田和賀代准教授)の研究成果の一部を市民の方々に公開することを目的として実施しました。6月28日から7月19日まで全4回で、43名の受講応募がありました。

講座では、庄原の自然とそれに対する人々の働き

かけや営みに目を向けることで、自然から見た庄原の特徴を知り、自分たちの町への理解を深めることができました。受講者からも活発な質問や庄原の宝の紹介がありました。11月にはフィールド科学教育研究センターを利用した講座を実施します。

開催日	講師名	講座名
6月28日	前川 俊清	庄原の地理
7月5日	入船 浩平	庄原の自然
7月12日	福永 建二	遺伝資源研究と庄原
7月19日	村田和賀代	庄原の農業の歴史

国際交流

JICA研修

今年度も南東欧地域産業振興コースの研修が6月14日から7月23日まで実施されました。本学が実施内容の策定や、研修員の選抜に関わっている研修です。セルビア、マケドニア、コソボ、クロアチアから6名の研修員が参加し、6月20日には赤岡学長を表敬訪問しました。研修の一環として君田温泉にも宿泊し、日本の温泉文化について学びました。

本学からは、野原建一名誉教授、国際文化学科の伊東和久教授、生命科学科の吉野智之准教授、地域連携センターの上水流久彦助教らが、日本の中小企業振興政策や金融、産学官連携、海外販売戦略などについて講義を行いました。

研修員は広島県内の企業や東京の政府機関などでも研修を積み、多彩な地域振興支援策や産学官連携の仕組み、品質管理など、本国で活用できるアイデアを得て帰国しました。アクションプラン発表会には国際文化学科の学生の参加もあり、研修生も喜んでいました。

地域連携

三次の贅沢ゆず

本キャンパスから産まれた商品

三次地域の農産品としてはピオーネやアスパラなどが有名ですが、たねなし柚子の生産量は県内で1位、中国地方でも有数の産地であり、冬季における隠れた特産品となっています。柚子には、通常「たね」があると認識されていますが、三次では「たねなし柚子(多田錦)」が特産となっています。昨年より三次市の亀の丸果樹生産組合の戸野淳二氏と田井章博生命科学科准教授が共同研究

を行い、抗酸化物質(ビタミンCと4種類のフラボノイド)の存在を確認して、商品を開発、このたび販売を開始しました。「三次の贅沢ゆず」は、たねなし柚子(多田錦)の果汁に広島県内産蜂蜜などを加えて作った爽やかな飲料です。評判が非常に良く、今年の商品は既に売り切れてしまいました。来年の販売が待たれます。



産学官連携

第8回三次イノベーション会議総会

7月15日、みよしまちづくりセンターにおいて約25名を集めて開催されました。

22年度の事業報告、決算報告および監査報告が行われた後、23年度の事業計画案と予算案についての提案がなされて承認されました。23年度は、前年度からの事業を継続して行うことに加え、広報活動を一層推進

するために、新たに三次ケーブルテレビジョン、三次市広報を利用した周知活動を行うこととしました。



研究紹介

バイオマスを活用した資源回収

生命環境学部環境科学科 教授 原田 浩 幸

肥料の原料となるリン鉱石とカリウムは国際的に品薄状態が続いており、価格が急騰しています。そればかりか、米国はすでに輸出禁止、今年4月からは、最大の産出国である中国も化学肥料の輸出関税を100%と大幅に引き上げ、翌5月にはリン鉱石の関税も100%に引き上げています。日本はリン鉱石をほぼ全量輸入に頼っており、リン・カリが日本にもし入ってこない状況になると日本の農業は立ち行かなくなります。一方でバイオマスは積極的資源の循環の意味および低炭素社会の構築の意味からその利用促進を期待されています。当研究室ではこのような背景から現在利用されていない廃棄物バイオマスを利用してリン・カリの排水や廃棄物からの回収を目指しています。特に畜産廃液や農業廃棄物を対象として、回収すべき吸着剤も農業廃棄物・食品加工業廃棄物を想定しています。リンに比べるとカリは研究の報告が少ないので、技術の先導ができるようにしたいと思います。

野菜栽培で地域を活性化したい！

生命環境学部生命科学科 准教授 甲 村 浩 之

4月に本学部に新規開設されたフィールド科学教育研究センター主任として着任しました。専門は蔬菜園芸学です。昨年までの26年間、広島県職員として農業技術センターや農業技術大学校で野菜を主体とした育種、組織培養、機能性研究や栽培法の開発・普及・教育に関わってきました。当センターは本学部が3年間取り組んできた教育GPプログラムの後継として、中山間地域の資源や環境を活用して、食糧や環境等の現代的問題を解決する人材の育成が目的です。専門の野菜と合わせ、果樹・水稻・花き・畜産物と共に、加工・販売等6次産業化につながる研究・教育やPRをしていきたい。また、専門研究では、夏秋トマトの夏季高温期の良食味・高品質化、ホワイトやパープルを含むアスパラガスの高品質長期採り栽培、ハウレンソウ周年栽培の安定化等、中北部地域特産野菜の栽培改善を主体に取り組みます。また、伝統野菜や新規導入野菜の栽培にも取り組み、農業者や関係機関と連携して、地域の活性化の一翼を担うことができればと考えています。日本園芸学会、日本農業教育学会に所属しています。

地域連携

油分分離装置の出品

本キャンパスから産まれた商品

生命環境学部環境科学科の江頭直義教授及び三苫好治准教授は、地元企業、商工会議所と協力し、鉱物資源であるタルクを活用した排水からの油分分離装置(右写真:中央に装置)を開発しました。長岡鉄工建設より完成した装置(特許出願済)は広島市で開催された平成22年第5回信用金庫合同ビジネスフェアに出品されました。本装置の特徴は、吸着した油を簡単に除去し、再使用が可能なおところにあります。今後、油を排出する様々な事業所での活用が期待されます。



三原キャンパス

MIHARA CAMPUS

公開講座

三原シティカレッジ：市民講座 「佐木島を皆で歩こう」



〈三原沖に浮かぶ佐木島〉

本講座は、平成22年9月10日と17日にペアシティ三原で行われた座学及び26日の実際に佐木島を歩いた、ウォーキング体験と、計3回にわたり実施されました。まず、10日の座学は16名の参加があり、佐木島ボランティアガイドによる「①佐木島ガイド」と題した佐木島の紹介と、「②佐木島砂浜歩行の実際」の紹介（講師 大塚）として大学の研究なども含めての講演をしました。次に17日の座学では、13名の参加者に対して沖貞明教授による「③ウォーキングで注意するポイント—整形外科医から気をつけたい下肢の関節痛—」の講演と、金井秀作教授から「④準備体操としてのストレッチとウォーキングの解説」と題して、ウォーキングの準備運動、特にストレッチ運動について講演があり、その後に砂浜ウォーキングの方法の指導がありました。26日の佐木島での本番には実に24名の参加があり、中には就学前のお孫さんと一緒に島一周の島遍路ウォーキング（12km）を楽しまれた方もいらっしゃいました。

それでは、ここからは本講座での佐木島ガイドをしましょう。鷺港に到着後、準備体操を行って大野浦海岸～長浜～向田方面に、途中の右手海上に「裸の島」のロケ地である宿禰島（すくねじま）を見ることができます。対岸に小佐木島（人口約12人）を見て歩くと、眼下の海は溪流を思わせるほどの豪快な潮流。次にやってくるのは、素晴らしいサンセットビーチの長浜海岸、ここが私どもの研究フィールドで砂浜ウォーキングを展開するビーチです。ここから、「砂浜専用履物」が生まれました。砂浜歩行を楽しんで向田港で昼食の後、「磨崖と霊石地蔵（まがいわれいしじぞう）」に手を合わせて、須ノ上～佐木への南の半周を歩きます。こちら方面には別荘地が多く、眺めは格別です。道々には島八十八か所のお大師様が設けられています。途

中に島で唯一の「パン屋さん」があり、ここでホッと一息です。ドンドンと鷺港に向かう途中の海岸線にある「止めよう船との競走」の看板をしり目に鷺港へ、ここの自由市場で野菜や果物を仕入れて、一路、三原港へ。贅沢な一日に感謝、お疲れ様でした。

（保健福祉学部理学療法学科 教授 大塚 彰）



〈砂浜専用履物での砂浜ウォーキング〉

地域連携

佐木島トライアスロン

佐木島の活性化・元気のある島づくりを目指して、平成2年から開催されているトライアスロン大会は、8月28日で第22回を迎えました。しかしながら、島民の高齢化に伴い存続が危ぶまれています。そこで、本学も大会運営のボランティアとして平成20年から参加しています。保健福祉学部理学療法学科の3年生を中心に毎年40名程度が、大会当日の受付や給水の支援および後片付けに汗を流しています。学生達の献身的な活動は島の方々から高い評価を得ています。

学生たちは参加当初から選手としてもトライアスロンに挑戦し、チームリレーでは良い成績を残すまでになりました。平成22年に行われた第21回大会では、本学学生、野口瑛一選手がみごとに力強く宣誓の大役を果たしました。

これからも多くの学生たちとともに、暑くて暑い真夏の感動を共有し、三原の思い出をつくるためにがんばります。（文責 大塚 彰）



〈水泳のスタート〉

佐木島のホームページはこちらです↓
<http://sagisima.web.fc2.com/>

研究紹介

放射線画像の画質と被曝に関する研究

保健福祉学部看護学科 教授 吉田 彰

現在、医療画像分野では、さまざまな撮像モダリティが使用されています。その中で昔からよく使われてきたものにX線やγ線などの放射線を利用した画像診断装置があります。



放射線画像診断の一連の過程は、次の通りです：

①人体（被写体）に均一な強度の線を照射します。照射するX線エネルギーと人体の組成（原子番号、密度、厚さ）によって人体を透過するX線強度が異なり、X線強度分布が生じます。②人体を透過したX線の強度分布は目に見えない、いわゆる不可視情報ですので、検出器で捉えて目に見える画像にします。③この画像を医師が観察し、まず医学的な異常信号があるかどうか（信号検出）判定し、異常信号があれば病変部の部位や広がり、パターンなどから何の病気かその進行度や悪性度とともに決定します（診断）。

この最終的な画像診断の正確さに大きく影響するのが画質です。画質が悪ければ誤診につながります。画質は、主としてコントラスト、解像度、画像ノイズの3つの特性因子によって評価されています。これらの画質因子は、元々は人の主観的・心理的な量でしたが、時代とともに定量的な物理量へと発展してきました。私の初期の頃の研究は、この物理的画質特性を正確に測定できるシステムの開発でした。次いで、開発された測定システムを使って、さまざまな放射線画像診断用撮影装置の画質の良し悪しを比較評価しました。X線照射量を増やせば、画像ノイズは改善されますが、被曝の観点からむやみにX線を増して撮影できません。最少の被曝で診断的に価値のある画像を作り出す必要があります。このため、被曝を考慮した最適な画質設計が必要となり、そのような研究もしてきました。

放射線画像診断装置もほとんどデジタル化してきましたが、その中で特に、最近の研究の中心はデジタルマンモグラフィに関係した画質と被曝についてです。

地域連携

健康情報提供番組 ～三原市チャンネル～

三原市民のみなさまの健康づくりの推進に貢献することを目的とし、平成19年9月から三原市の広報番組「三原市チャンネル」に参加し、番組の一部として健康情報を提供しています。

※「三原市チャンネル」の放送スケジュール (三原TVコミュニティチャンネル2ch)

放送月		健康情報提供の内容
平成23年	10月	鉄分を補いたい人のための食事
	11月	カルシウムを補いたい人のための食事
	12月	摂取エネルギー量を控えたい人の食事
平成24年	1月	塩分を控えたい人のための食事
	2月	便通をよくする食事
	3月	病気になった時のとっさの英会話
放送曜日		放送時間（15分間）
月・土・日		7:15～7:30, 12:15～12:30, 19:15～19:30, 20:15～20:30
火～金		7:15～7:30, 12:15～12:30, 19:15～19:30, 20:15～20:30, 23:15～23:30

「三原市チャンネル」の詳しい放送時間については、三原テレビ放送ホームページの『コミチャン番組表』をご参照ください。(http://www.mcat.co.jp/)

◆ 今後の講座等のご案内 ◆

● 第9回脳をみるシンポジウム in 三原

『アンチエイジング～老いを楽しむ～』

【対象】 どなたでも参加可能

【日時】 平成24年3月10日(土) 13:30～16:30

【場所】 三原リージョンプラザ

【定員】 400人(先着順)

【参加費】 500円 ※学生および65歳以上は無料

※要約筆記があります

● 三原シティカレッジ

年間を通して様々な講座を行っています。

三原シティカレッジの内容については下記のホームページをご覧ください。

http://www.mhr-cci.org/renkei/

地域連携センター長紹介・挨拶

西本 寮子 [地域連携センター長]

地域連携センターが発足して6年が経ちました。この間、自治体や企業、諸団体のみなさまと連携してさまざまな事業を実施し、地域の活性化に取り組んできました。3つのキャンパスの特色を活かして、地域に密着した大学としての役割を着実に果たしてきたものと自負しております。7年目を迎え、新たな体制で再スタートを切りました。元気なまちづくり、豊かな地域づくりをめざして、引き続き産学官連携の推進、知財の創出、多様な講座の提供などを通じて地域のニーズに応じていきたいと考えています。どうぞよろしくお願いいたします。



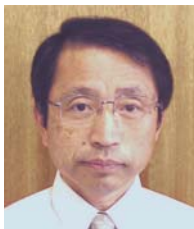
栗島 浩二 [広島地域連携センター長]

広島キャンパスでは、広島市を中心とする地域との連携活動として、包括提携を結んでいる企業や自治体との連携事業や、生涯学習をはじめとする多様な貢献事業を行っています。今後は、①学生を巻き込んだ地域貢献②地域、県民の期待に応える③広島の特徴作りと情報発信に貢献するという3つのミッションを掲げ、更なる質的向上とより一層の地域に開かれた魅力ある大学、信頼される大学を目指していきたいと考えています。そのための第一歩として、地域のニーズやウォンツをしっかりと捉える「マーケット・イン発想」の定着に取り組みます。



江頭 直義 [庄原地域連携センター長]

4月より当キャンパスセンター長を拝命しました生命環境学部（環境科学科）です。キャンパスの周りに大きな企業はありませんが、農産物有効利用あるいは工業品開発に関して連携可能な様々な企業がありますので、前センター長（三好教授）のように地域との連携強化を積極的に推進する予定です。また、大きな事業として11月に開催する「地域づくり連携サミット in 庄原」を盛り上げたいと考えております。他の事業に関しても学部間の協力がスムーズに行けばさらに実りある成果が挙げられると期待しております。皆様宜しく申し上げます。



近藤 敏 [三原地域連携センター長]

三原市との包括協定に基づく連携事業を中心に、特に、少子高齢化対策や発達障害児に対する特別支援教育のニーズに対して、保健福祉学部の強みを発揮しながら進めます。生涯学習では、引き続き公開講座、三原シティカレッジ、脳をみるシンポジウム、出前講座、広島保健福祉学会を開催し、地域交流では、キャンパスツアーや学生ボランティア活動およびトライアスロンさぎしま大会を支援します。また、広島県からの委託事業の看護教員養成講習会および昨年からはまった三原市長と県立広島大学生とのまちづくり懇談会を開催します。



編集後記

センター報第13号をお届けします。本号では、フィールド科学教育研究センターの開所をはじめ、公開講座、産官県立広島大学地域連携センター学連携、地域連携、国際交流等に関する記事を掲載しております。

皆様にはこれらの記事を是非ご一読いただき、地域に根ざした本学の取り組みに、引き続き、ご支援・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。(K)

編集発行

県立広島大学地域連携センター

〒734-8558 広島県広島市南区宇品東一丁目1番71号
電話 (082) 251-9534 / E-mail : renkei@pu-hiroshima.ac.jp

各キャンパス問合せ先

県立広島大学庄原地域連携センター [本号編集担当]

〒727-0023 広島県庄原市七塚町562番地
電話 (0824) 74-1704 / E-mail : gakujutu@pu-hiroshima.ac.jp

県立広島大学三原地域連携センター

〒723-0053 広島県三原市学園町1番1号
電話 (0848) 60-1200 / E-mail : mrenkei@pu-hiroshima.ac.jp